

コウノトリ放鳥直後期における豊岡市内の小学生の意識について
 Consciousness of Elementary School's Children in Toyooka city
 soon after the Re-introduction of Oriental White Storks

本田 裕子*

HONDA Yuko*

*大正大学人間学部人間環境学科

〔要約〕本研究は、兵庫県豊岡市でコウノトリの野生復帰事業が実施されていることを受けて、市内の小学校でコウノトリ学習がどのように行われ、またこどもたちの意識はどのようなものであるのかについて、放鳥直後期の調査を整理したものである。三江小学校では、放鳥開始以前から総合的な学習の時間でコウノトリを素材に3年生から6年生までさまざまなプログラムが展開されている。アンケート調査結果では、学年による回答が異なるものもあり、特に6年生ではコウノトリへの興味が他学年より低いというような特徴があった。豊岡市では2017年4月から「ふるさと教育」として、市内の小学校でのコウノトリ学習が一定時間設けられている。「ふるさと教育」の教育効果を検討する上で、放鳥直後期のデータは基礎資料として位置づけられる。

〔キーワード〕コウノトリ、野生復帰（放鳥）、兵庫県豊岡市、ふるさと教育

1. はじめに

兵庫県豊岡市は兵庫県北部地域に位置する人口83,083人（2018年1月31日時点の住民基本台帳人口）の自治体である。2005年から実施されているコウノトリの野生復帰事業においては、2018年2月時点で野外に生息する120羽のうち半数以上が市内に生息しており、重要な拠点となっている。豊岡市ではコウノトリを核としたまちづくりが展開されており、「第3次とよおか教育プラン（豊岡市教育振興基本計画）」（2015年）においても「コウノトリを核にした環境教育」に取り組むことが明記されている。

豊岡市では2017年4月から市内の全中学校区で小中一貫教育「豊岡こうのとりプラン」が開始され、共通して「ふるさと教育」・「英語教育」・「コミュニケーション教育」の3分野を「ローカル&グローバル学習の時間」として取り組んでいる。「ふるさと教育」は、目指すこども像を「豊岡の『ひと・もの・こと』のつながりと未来を世界標準で考え、ふるさと豊岡を自分の言葉で語り誇れる子」とし、

小学校3年生から中学校3年生までに、総合的な学習の時間を使い、「コウノトリ」、「産業・文化」、「ジオパーク」について学習する。

コウノトリについては小学校3年生と小学校5年生が学び、中学校3年生で3つのテーマ全体の学習のまとめを行う。小学校3年生では「コウノトリを知る」をテーマに15校時、小学校5年生では「コウノトリと共に生きる」をテーマに15校時学習する。豊岡市教育委員会は、それぞれの標準カリキュラムを定めているが、実際には現場の教員の裁量にゆだねている。しかし、一定の時間コウノトリについて学習する枠組みが設定されていることから、これまでコウノトリ学習を行ってこなかった学校にとっては教員の関心や知識に関係なく、コウノトリ学習を展開する必要がある。2017年3月には、「ふるさと教育」の副読本として「豊岡ふるさと学習ガイドブック」が発行された。副読本の作成経緯については本田（2017）に整理されており、資料集としてコウノトリ学習の重要なツールとなっている。

筆者は現在、豊岡市「コウノトリ次世代育成ふるさと教育効果検証共同研究」として、市内の29の小学校のこどもたちや教員を対象に、「ふるさと教育」でのコウノトリ学習の教育効果についての調査研究を実施している。

ところで筆者はコウノトリ学習の先進校である豊岡市立三江小学校において、2003年から2006年にかけて教員への聞き取り調査やこどもたちへのアンケート調査を実施した。今後、「ふるさと教育」の教育効果について継続的な調査が行われていくに際して、豊岡市内の小学校におけるコウノトリ学習についての萌芽段階における基礎的調査を整理しておくことは重要である。そこで、本研究では、当時の調査を「コウノトリ放鳥直後期」と位置づけ、当時のコウノトリ学習の概要ならびにこどもたちのコウノトリについての意識の実態を整理し、報告することとする。

2. 研究目的および方法

上述を踏まえて、本研究の目的は、豊岡市立三江小学校を対象に、「コウノトリ放鳥直後期」のコウノトリ学習の状況やこどもたちのコウノトリについての意識を明らかにすることとする。なお、三江小学校は、コウノトリの野生復帰事業の実施拠点である県立コウノトリの郷公園が校区内にあり、環境保全活動に積極的に取り組む学校を対象にした兵庫県の「グリーンスクール」の2004年度に「コウノトリと共生する地域づくり」として表彰されるなど、コウノトリ学習の先進校である。

筆者は2003年8月から2006年1月にかけて三江小学校の佐々教諭（当時）からコウノトリ学習についての聞き取り調査を実施した。また、2006年1月には3年生から6年生までのこども159人に、コウノトリ学習ならびに2005年9月に放鳥されたコウノトリに関するアンケート調査を実施した。

本研究では当時の調査結果を整理することで、「コウノトリ放鳥直後期」のコウノトリ学

習の状況およびこどもたちのコウノトリへの意識を考察し、今後の「ふるさと教育」におけるこどもたちの意識を考察する上での基礎資料として位置づける試みとする。

3. 結果

3-1. コウノトリ放鳥直後期の三江小学校における「コウノトリ学習」の取り組み

ここでは三江小学校の「コウノトリ学習」について聞き取り調査結果に基づいて整理する。三江小学校では、2002年から始まった総合的な学習の時間に、コウノトリをカリキュラムの中に位置づけている。総合的な学習の時間は「ふるさと三江を愛そう」をスローガンに行っている。

3年生は、「気づこういのち」をテーマに、コウノトリに限らず生き物全体に興味を持つことが目標とされる。週1回程度、県立コウノトリの郷公園を訪問し、ガイドウォークや観察会を通じて生き物について学ぶ。コウノトリに関しては、足の大きさといった生態を中心に学習をしているが、生き物全体の頂点としてコウノトリを位置づけることが狙いとなる。また、2005年9月の放鳥式典では3年生全員が「コウノトリのうた」を歌った。

4年生は、「考えよういのちのつながりを」をテーマに、アイガモ農法による稲作体験を通じて、米づくりの過程や田んぼの生き物について学ぶ。こどもたちにとっては、農業者との交流はもちろん、アイガモ稲作のもち米をおだんごにして教職員への販売、お世話になった方々に配布するなど地域の人たちとの交流の機会となる。また、わらを使ってコウノトリの巣作りも行っている。

5年生は、「みつめよういのち」をテーマに、「いのちの調査団」として、川や田んぼに生き物がどの程度いるのか、絶滅危惧種や外来種はどの程度いるのかについて生き物調査をする。野生復帰については、家族や地域の人にインタビューも行い、さらに「コウノトリ

目撃調査」として、放鳥されたコウノトリの目撃情報を1年生から6年生に呼びかけ、収集した情報を三江地区の地図上で展示をする。また、コウノトリの飼育体験も行っている。

6年生は、「感じよういのちの尊さ」をテーマに、地域とのつながりについて、三江地区の歴史を中心に学ぶ。そして、3年生からの学習成果を発信していく位置づけにあり、「コウノトリフェスティバル」を開催して、1年生や2年生を対象に紙芝居、クッキー販売などをする。コウノトリについての絵本作りや「松の木調査」(マツノザイセンチュウ抽出実験)も行う。

つまり三江小学校では、コウノトリを教育の素材として明確に位置づけていた。そしてコウノトリ学習は、環境学習、福祉学習、地域学習のそれぞれの入り口として設定されている。環境学習の入り口とは、ガイドウォークや生き物調査などを通じて生き物について知り、親しむことを意味する。福祉学習の入り口とは、家族や地域の人など年配の人にコウノトリのことをインタビューすることで、年配の人を労わる対象だけではなく、「自分の知らないことを知っている先輩」というような新たな捉え方ができることを意味する。地域学習の入り口とは、スローガンが「ふるさと三江を愛そう」であり、地域について学習する過程で、コウノトリが「地域のもの」として認識できる。また、稲作体験やコウノトリに関するインタビューを通して地域の人との交流ができるという意味でも、地域学習の入り口としての役割を果たしている。

佐々教諭によると、子どもたちは、放鳥開始以前からコウノトリの野生復帰を身近に感じているようで、2002年に豊岡市に飛来した野生コウノトリ「ハチゴロウ」が、たびたび校庭のヒマラヤ杉にとまることもあり、子どもたちはそれを見て大喜びし、コウノトリを身近に感じるようになったとのことである。また佐々教諭は、家族の中で野生復帰に反対

する人に、子どもたちが「いや、そうではなくて」と反駁し、コウノトリが地域において果たす役割について説明できるようになることも目指していると話していた。

以上のように、三江小学校でのコウノトリ学習は放鳥が開始される2005年以前から実施されている。校区内の県立コウノトリの郷公園を活かし、ただコウノトリのことを学ぶだけではなく、さまざまな学習の素材としてコウノトリを最大限活用している、ということが特徴となる。

3-2. アンケート調査結果

ここでは2006年1月に三江小学校3年生から6年生までの子どもたちに実施したアンケート調査結果について取り上げる。アンケート票の質問項目は性別やコウノトリの目撃の程度など6問で構成され、枝間を含めると15問となる。その中から今後の「ふるさと教育」との比較を行う上で関連のある質問と結果を取り上げ、以下で報告する。

まず、コウノトリへの興味については、3年生から5年生までは9割以上が「興味あり」と回答していたが、6年生は約3割程度であった(表1)。

表1. コウノトリへの興味

	興味あり		興味なし		合計	
3年生	45	90.0%	5	10.0%	50	100%
4年生	34	97.1%	1	2.9%	35	100%
5年生	34	91.9%	3	8.1%	37	100%
6年生	11	29.7%	26	70.3%	37	100%
全体	124	78.0%	35	22.0%	159	100%

「興味あり」と回答した子どもたちに「コウノトリのどんなところが1番おもしろいと思いますか?」と質問したところ、いずれの学年も「コウノトリの体のしくみ・特徴」が最も多く選ばれていた(表2)。

表 2. コウノトリの 1 番おもしろいところ

	コウノトリの体のしくみ・特徴		コウノトリの暮らす環境		地域の人とコウノトリとのかわり		放鳥		その他		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3年生	29	64.4%	3	6.7%	2	4.4%	8	17.8%	3	6.7%	45	100%
4年生	17	50.0%	7	20.6%	0	0.0%	10	29.4%	0	0.0%	34	100%
5年生	14	42.4%	11	33.3%	1	3.0%	7	21.2%	0	0.0%	33	100%
6年生	5	45.5%	1	9.1%	4	36.4%	0	0.0%	1	9.1%	11	100%
全体	65	52.8%	22	17.9%	7	5.7%	25	20.3%	4	3.3%	123	100%

表 3. コウノトリ放鳥の感想 (複数回答)

	うれしかった		おどろいた		心配になった		つまらなかった		特に何も思わなかった		その他		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3年生	32	64.0%	25	50.0%	18	36.0%	0	0.0%	3	6.0%	6	12.0%	50	100%
4年生	21	60.0%	5	14.3%	15	42.9%	0	0.0%	1	2.9%	2	5.7%	35	100%
5年生	23	62.2%	19	51.4%	14	37.8%	0	0.0%	2	5.4%	0	0.0%	37	100%
6年生	4	10.8%	6	16.2%	4	10.8%	7	18.9%	20	54.1%	1	2.7%	37	100%
全体	80	50.3%	55	34.6%	51	32.1%	7	4.4%	26	16.4%	9	5.7%	159	100%

表 4. コウノトリ放鳥の評価

	よかった		どちらともいえない		よくなかった		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3年生	43	86.0%	6	12.0%	1	2.0%	50	100%
4年生	31	88.6%	4	11.4%	0	0.0%	35	100%
5年生	25	67.6%	10	27.0%	2	5.4%	37	100%
6年生	3	8.1%	33	89.2%	1	2.7%	37	100%
全体	102	64.2%	53	33.3%	4	2.5%	159	100%

表 5. 放鳥による変化 (複数回答)

	コウノトリに親しみ・身近なものと感じるようになった		コウノトリに興味をもつようになった		コウノトリを守っていききたいと思った		コウノトリが生きていけるか心配		何も思わない		その他		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3年生	29	58.0%	32	64.0%	29	58.0%	26	52.0%	3	6.0%	6	12.0%	50	100%
4年生	20	57.1%	17	48.6%	12	34.3%	11	31.4%	1	2.9%	0	0.0%	35	100%
5年生	24	64.9%	7	18.9%	17	45.9%	13	35.1%	2	5.4%	0	0.0%	37	100%
6年生	8	21.6%	5	13.5%	2	5.4%	4	10.8%	22	59.5%	0	0.0%	37	100%
全体	81	50.9%	61	38.4%	60	37.7%	54	34.0%	28	17.6%	6	3.8%	159	100%

表 6. 放鳥されて 1 番したいこと

	コウノトリが学校にくるようにしたい		えさをあげたい		コウノトリのことを知らない人たちにコウノトリのことを教えたい		ここの地域の自然について調べたい・勉強したい		とくにない		その他		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
3年生	7	14.0%	18	36.0%	4	8.0%	6	12.0%	2	4.0%	10	20.0%	50	100%
4年生	12	34.3%	8	22.9%	7	20.0%	4	11.4%	1	2.9%	3	8.6%	35	100%
5年生	11	34.4%	12	37.5%	7	21.9%	0	0.0%	2	6.3%	0	0.0%	32	100%
6年生	3	8.3%	2	5.6%	4	11.1%	5	13.9%	22	61.1%	0	0.0%	36	100%
全体	33	21.6%	40	26.1%	22	14.4%	15	9.8%	27	17.6%	13	8.5%	153	100%

2005年9月の放鳥の感想については、3年生から5年生までは「うれしかった」が最も多く選ばれ、かつ「心配になった」も多く選ばれていた。一方で、6年生は「特に何も思わなかった」が最も多く、他学年と対照的であった(表3)。放鳥の評価については、「よかった」が、3年生・4年生が8割以上であったのに対して、5年生は67.6%、6年生では8.1%となっている。6年生の約9割は「どちらともいえない」であった(表4)。「どちらともいえない」理由としては、「農薬を使っているから」が10名、「自分には関係ないから」が10名、「ごみ、水銀や松の木が少ないなどコウノトリに悪い影響」が5名であり、他には「えさが少ない」や「放鳥されても変わらない」、「コウノトリは郷公園にいたいだろうから」などが記述された。

放鳥による変化では、3年生が「コウノトリに興味をもつようになった」、4年生・5年生が「コウノトリに親しみ・身近なものと感じるようになった」が最も多く選ばれたが、6年生は「何も思わない」が最も多かった(表5)。放鳥されて1番したいことについても、6年生は「とくにない」が最も多く、他学年が「えさをあげたい」や「コウノトリが学校にくるようにしたい」と回答しているのと対照的であった(表6)。

なお、回答は性別で違いがあり、たとえば「コウノトリへの興味」においては、男子よりも女子の方がコウノトリへの興味が高いことが伺える(表7)。

表7. コウノトリへの興味と性別との関連

	興味あり		興味なし		合計	
男子	56	70.0%	24	30.0%	80	100%
女子	68	86.1%	11	13.9%	79	100%
全体	124	78.0%	35	22.0%	159	100%

4. 考察

以上から、三江小学校ではコウノトリ放鳥開始以前より、総合的な学習の時間の中で学

年ごとにコウノトリを活用したさまざまな学習プログラムを展開していた。そして単純にコウノトリのことを学ぶだけではなく、コウノトリの主な生息環境である水田での生き物調査や農業に関する学習、地域の人へのインタビューなど、さまざまな学習の素材にコウノトリを活用していることが特徴である。

アンケート結果では、学年により回答に違いも見られた。コウノトリの1番おもしろいところとして、3年生は「コウノトリの体のしくみ・特徴」に回答が集中していたが、4年生や5年生では「放鳥」や「コウノトリの暮らす環境」にも回答が分散していた。3年生の学習では、県立コウノトリの郷公園を中心にコウノトリの生態を含めた生き物全体について学んでいることが関係している。4年生や5年生については、4年生がアイガモ農法による稲作体験、そして、5年生では生き物調査を取り入れていることから、「コウノトリの暮らす環境」が多く選ばれていた。

放鳥の評価については、3年生や4年生では「よかった」とする回答が高いが、5年生や特に6年生では「どちらともいえない」の回答が多い。ただし、その理由では「農薬を使っているから」というように農業の現状がコウノトリの生息に影響を及ぼすことを心配していることが伺える。これは彼らが3年生の時からコウノトリや農業のことを学んできたゆえの思いといえる。

放鳥によって3年生・4年生・5年生には変化があり、「えさをあげたい」や「コウノトリが学校にくるようにしたい」といった気持ちをもたらしていた。これらに比べて「知らない人に教えたい」や「地域の自然について勉強したい」という学習上の発展につながるような回答が選ばれていないのは、すでに学んできていることであるためと考えられる。

アンケート調査での違いで顕著なことは、6年生の回答が他学年と比べて異なるものとなったことである。彼らは3年生の時からコ

ウノトリ学習をしてきており、本来であれば他学年よりもコウノトリについて積極的な回答となることが期待できるが、そのような結果にはならなかった。このことについては、もちろん学年の特徴によるものもあるが、むしろ3年生からコウノトリ学習を行ってきたことで、コウノトリ学習が「当たり前」のものとなっていたり、もしくはすでに「飽き」・「マンネリ」のような気持ちが生まれてしまったりしたことも予想される。

また、このような傾向は放鳥直後期ゆえの特徴とも推察できる。そもそも、アンケート調査が2006年1月の放鳥直後期であるため、当時は、2005年9月に放鳥された5羽のみの生息であった。しかし現在では野外に100羽以上のコウノトリが生息している。そのため、「えさをあげたい」などのコウノトリの生息を心配する回答や「自分には関係ない」と野生復帰に消極的な考えを背景にした回答は、放鳥直後期に表れる特徴とも考えられる。なお、一部の回答では、「コウノトリが稲を食べる」といった誤った認識もあった。このような認識を軌道修正するために、ふりかえりの場面を多く設けるなどの機会が必要といえる。

性別による違いとして、男子がコウノトリについて興味がない傾向がみられているが、これは今回調査した子どもたちの特徴であるのか、それとも男子がそもそもそのような傾向にあるのか、この結果からだけでは推測できない。ただし男子が興味をもつような学習プログラムの工夫も必要になってくるだろう。

5. おわりに

本研究の調査が終了した2006年1月以降も、三江小学校では引き続きコウノトリ学習が展開されている。2006年3月に校庭内に設置された人工巣塔で、コウノトリの繁殖が2013年に初めて成功し、子どもたちはコウノトリを間近で観察できるようになっている。

冒頭で述べたように、2017年4月以降、

豊岡市内では29の小学校すべてで「ふるさと教育」が開始され、3年生と5年生でコウノトリ学習が一定時間設けられることになっている。これまでは三江小学校のようなコウノトリ学習をするうえで恵まれた学習環境にある先進的な小学校や、コウノトリや生き物に関心のある教員がいる小学校でのみコウノトリ学習が展開されていた。したがって、「ふるさと教育」によって、コウノトリ学習は新たな転換点を迎えたことになる。

本研究で報告したデータは、10年以上経過したものであるが、学年や性別による回答傾向の違いや、一定時間学習したことによる「当たり前」・「飽き」・「マンネリ」といった可能性があることは、今後の「ふるさと教育」の教育効果を考える上で示唆を与えるものである。

当時のコウノトリ学習および子どもたちの意識と、現在進行形の「ふるさと教育」によるコウノトリ学習および子どもたちの意識との比較を今後行っていくことで、よりよいコウノトリ学習の構築を目指していくことが求められる。

文献

本田裕子 (2017) 野生復帰事業が行われている自治体での副読本教材の作成状況について、環境情報科学学術研究論文集 31, 279-282

付記

本研究で用いたデータの一部は、東京大学大学院新領域創成科学研究科2003年度修士論文「野生復帰による野生生物の新たな価値創出に関する研究」でも利用したものである。調査に際して、三江小学校の佐々真由美教諭（当時）および子どもたちには大変お世話になりました。まことにありがとうございます。